

十畝氏からの勧誘で暹羅に於ける日本美術展の爲めに揮毫した、「山田長政」であつた、なほ門下には安田鞆彦、川崎小虎、磯田長秋、尾竹國観、伊東紅雲、川船水棹氏等（が）である。

また、同日の『時事新報』は次のような正木直彦の談話筆記を掲げている。

小堀君は、年も一番上であり日本畫壇の長老であるが二十五周年記念を行ふ此秋の帝展を前に控へて亡くなられたことは、返す／＼も残念です、小堀君は明治二十九年美術學校の助教教授になつたが三十年（三十二年）に辭し、その後私が四十一年教授に呼び迎へて今日に及んだ次第で二十五年間美術學校に勤続されたことになつてゐます、同君は美術學校教授であつた故實家で畫家の川崎千虎門で、鎌倉時代の大和繪を狙つてゐた、それで同じ大和繪と云つても吉川靈華、松岡映丘等の大和繪とは違つて太い線を用ゐて居た、川崎千虎門である關係上同君も非常に故實に詳しく鎧の手入などさへ自分でやつてゐた位です、若い時は仲々面白い逸話もあつたそうですが年を取つてからは非常に無口な人でした

この談話にもあるとおり、鞆音は鎧の研究にかけては第一人者で、晩年は主にその研究に精力を注いだ。昭和四年十二月二十日の『都新聞』を見ると、四領の鎧と並んだ鞆音の写真が大きく掲げられており、解説にそれらの鎧は石清水八幡の鎧、敵島の重盛着用の鎧、甲州神田天神の小桜おどしの鎧、武州御嶽山の宝物畠山重忠着

用の緋おどしの鎧の復元模造で、鞆音門下の磯田長秋、伊藤紅雲、小山栄達、丹波緑川の依頼で鞆音が故実研究の蘊蓄を傾けて図面を描き、谷中の鎧師小野田光彦に製作を依頼して数年かけて完成させたことが記されており、その傾注ぶりが窺われる。

⑥ 正木直彦の帝国美術院長就任

正木直彦校長は大正八年の帝国美術院創設に大きな役割を果たし、以来森鷗外、黒田清輝、福原鎌二郎ら歴代院長のもとで幹事をつとめて来たが、昭和六年十一月二十五日に院長に就任した。同院と本校との関係は、同院創設以来会員の半数近くを本校教官が占めて来たことにも示されているとおり、極めて密接であつたが、正木の院長就任によつて更らに親密の度が増すことになった。なお、教授矢代幸雄は正木のもとで同院幹事をつとめることになった。

⑦ 白浜徴銅像除幕式

昭和六年四月八日、工芸部校舎の師範科手工教室玄関前に白浜徴（同三年死去）の銅像が建立され、除幕式が行われた。『東京美術学校校友会月報』第三十卷第一号にその模様が記録されている。それによると、大正十五年四月の白浜徴還暦祝賀会で銅像建設の議が持ち上がり、原型を水谷鉄也が製作、津田信夫が鑄造して昭和二年に像が出来上がった。それは校内に保管されていたが、錦巷会の尽力により校庭に建立することになり、あらためて水谷鉄也設計の台石が作られ、像が安置されたのである。銅製パネルの「故白浜徴先